

一人ひとりの子ども・子どもたちの成長と尊厳を、  
私たち大人・保護者・教師が支援して、応援して！

飛田 登美夫

はじめに

今年度の参加者は小中高関係者・福祉関係・大学生の皆さんの参加で全体として35名を越える方々の分科会討議であった。最初に昨年度のまとめを執筆された内島貞雄さんから昨年の報告と議論について報告があり、そしてこの何年間か継続してきた次の4つの検討課題を継続していこうとのべられた。①福祉的な視点を含んで実践を展開する。②自分の人生、今後の社会に対する子どもたちの根源的な問いを大切にする。③学力の基礎の形成や定着を図るさいに、子どもたちとの関係づくりと切り離さないで取り組む。④教育政策や教育行政の動きを批判的にとらえ、個々の子どもが力を発揮できる場面を保障する。加えて、1、幼児教育から青年期までの発達を丁寧を支える視点を継続してきたこと。2、不登校やひきこもり。（更に、障害をかかえた子どもたちの支援のあり方を追求してきたこと。）3、宗谷の澤英樹さん（個と集団とのかかわり）末村哉子さん・熱海早苗さん（稚内地域全体として子どもたちの成長・発達を支援する取り組み。）八雲の長野貴美子さん（見逃しがちになる子どもにしっかり対峙し、医療・福祉関係との連携を図りながらの実践。）北広島の大澤伸哉さん（壁新聞づくりを通して高校生や教師の意識改革。ひとりの高校生の成長を願う4年間の取り組み）などを読み返す中で2日間の分科会討議に加え、学びが再確認されると指摘された。

【報告1】 ただ「いる」こと、ただ「ある」こと

札幌・訪問型フリースクール漂流教室（札幌市中央区） 相馬契太さん

※漂流教室は所属関係はなく、居場所を大切にしている。

現在20数名。送迎スタイルを取っている。交流がスムーズで会話が変わって来る。

1 事例の中から

- ・利用者A君：高校3年生（19歳）中学生のころ不登校で漂流教室利用。高校進学に伴い訪問終了。高校休学で訪問教室再利用。

- ・スタッフ：大学4年生（22歳）大学2年の夏から訪問開始。
- ・利用形態：週に1回、一時間の訪問
- ・交流期間（2013年～2016年）と交流を通しての深まり。

## 2 訪問とは

- ・A君としては：一週間の区切りのような感じを持てる。家族以外誰とも合わない日々だったので、訪問に合わせて掃除をした。一週間のことを話したりゲームしてたりだけでも話しやすかった。学校は行かなきゃダメかと思い編入を考えたけど、単位がうまく移行できなくて情報関係の大学を考え勉強しようと考えている。
- ・スタッフとしては：最初は「俺があいつのために！」とっていて、あまりうまくいかなくて焦ったりした。けど、たまに外に出たのは良かったと思う。あのころからだんだん気が楽になって、訪問にも余裕が出来た。訪問を始めたころに比べて、向こうも自分もずいぶん変わったと思う。特に向こうの成長がすごいですね。最近は一週間の時間が一番ほっとします。

※報告者の相馬さんは『逆転現象が素晴らしい』と指摘されながら・・・

〈1〉対話で作られる関係として。

- ①他人の存在→モノログがダイアログになる。
- ②体験を他人に語る→言葉にすることで経験を再構成する。
- ③他者の内在化。

〈2〉閉じられた世界から

- ①訪問しているスタッフも揺れる（それぞれに現実を持つ）。
- ②最初から狙ってもたどり着かない。会い続け、対話し続けこといつしか到達【個人と個人が安全な環境で定期的に対話を通じて関係を結ぶ→相互に影響を受けながら変化、成長】

## 3 排除型社会と自己

※ハイ・モダニティの社会：『ポストモラトリウム時代の若者たち』。より近代化によりローカルな結びつきから時間と空間が切り離され、グローバルな世界の文脈の下に人の生活は再構成される。「人は流動的で不確定な社会で不安な未来を生きるしかない」→「リスク管理の徹底（社会も個人も）」・子どもから大人への移行期間（モラトリウム期）を社会から排除→「人間の排除」

この指摘をうけて、分科会のまとめを担当した私は、20年余り前から《子ども期の喪失から、更に剥奪と言われた教育研究者の堀尾輝久氏、高垣忠一郎氏などの教えを思い返された。そして、相馬さんは『人間の成長、変化への信頼の喪失・挫折、逸脱を許さず個人の資質とする』とされた。

#### 4 「モラトリアム」を保障するもの

漂流教室を通して利用者とボランティアとの関係性の中から、「自己と自己を取り巻く空間の地図であり、その空間には様々な人間たちの関係、都市や自然との関係が組み込まれ、『社会へ出て行く人たちの「武器や」「防備」になってくれたら幸い』と報告を結ばれた。

### 【報告2】「フリースクールの子どもの成長～異年齢集団と給食の取り組み～」

札幌自由が丘学園 高村さとみさん

#### 1 はじめに

札幌自由が丘での子どもたちの様子を見、接する中で、個人ではなく集団としての成長を感じる場面がたくさんある。今回、「異年齢集団」と「給食」という視点から子どもたちの元気のヒミツを紹介された。

#### 2 札幌自由が丘学園の概要

- ・ 1993年11月設立
- ・ 小学生数名と中学生20名程度の在籍
- ・ 午前中は教科学習、午後は体験的な活動

#### 3 子どもが学年を意識するとき

- ・ 中学3年生のA君「どうやってみんなをまとめていったらいいんだろう」
- ・ 中学3年生のB君「みんなが元気になることをしよう」
- ・ 中学2年生のC君「小学生に頼るのはさすがに情けないよね」
- ・ 中学3年生のD君「3年生はいろいろやらなきゃいけないのか・・・」
- ・ 小学生のE君「大富豪の追加ルールがたくさんある。中学生はすごい」

普段は学年に関わらず仲良く遊ぶ子どもたちも、ふとした時に学年を意識した顔を見せ、特に給食を通した時に顕著に見られる。

- 4 今年度から、毎週水曜日だけ給食を実施した。その取り組みの中で工夫すること、ルールを提案することの必要性を実感する。「先に食器の数を合わせよう」「使う食器は一か所にまとめよう」「洗い場の片方は給食係が使うために空けて」などと自分で考えること、それを提案して話し合うことで「問題を解決する力」を獲得してきた。

## 5 おわりに

「給食活動」と「異年齢集団」であるが故に、日本社会に多く見られる「年齢が上がるにつれ、元々あるルールを守らなければならない」という意識を、ルールはなぜあるのか。変える必要はないのか。ルールを自分たちつくる余地のあるゆるやかこそ、子どもの成長に必要ではないでしょうかと提起された。

## 【報告3】 「通常学級のユニバーサルデザイン化のとりくみ」

北広島西高校 大澤信哉さん

### 1 大澤先生の自校も含め、現況の教育界に対する提訴

本校で「特別支援教育コーディネータ」として数々の事案と取り組んできて8年。全校生徒900名を越える札幌市周縁の大規模校に在職して、日々数の力に圧倒されながら格闘している。

膨大な数の、さまざまな困難を抱える生徒やその家族たちと向き合ってきて、また、当事者を抱えた先生方のサポートを切り返す中で気づかされるのは、私たち一人ひとりの力のなさや組織としての学校体制の脆弱さだ。

社会は急激に変化している。民主主義の力は日々弱まっている。それにとともなって学校もまた急速に官僚組織化している。管理職に呼応する勢力は増え、若いも事なかれ主義が横行し、学校の内も外にも上意下達をはね返す力はもはやない。

そこで思い知らされたのは、私たち教員という専門集団としての技術や経験、そして思いの「伝承」に失敗したという現実である。多くの若手教員は、私たベテランの技術や経験に興味・関心を抱いている。

しかし、彼らの渴望した思いを受け止め、より実践的に現場で生かせるとりくみは、公的な研修など上位組織のお仕着せのものしかないのが現状だ。

80年代の校内暴力が吹き荒れた時代から積み重ねられ、伝えられる技術や経験はあるだろう。少なくともエッセンスだけでもという思いから、「ユニバーサルデザイン」の名の下に「伝承」の仕掛けとして2年間とりくんでみた。

### 2 本校の概要

JR上野幌駅に近い北広島西の里に位置し普通科8クラス（1年のみ7クラス）

の大規模校である。特徴として、北広島にありながら、札幌市内からの通学者が8割を越えるため、通学だけでなく部活動や行事に困難性がある。内面的に穏やかな生徒が多く、生徒指導面では比較的苦労しないが、学習面、学力面で困難を抱える生徒が多い。年々、特別支援対象の生徒が増加している。（推定全体の15～20%）

1983年開校。『志行必成』（志して行えば必ず成るといふ意の造語）を校訓とし、「心情豊かな人間・責任感のある人間・実践力のある人間」の育成を教育目標に掲げている。

### 3 学校の「ユニバーサルデザイン」化に向けて、これまでのとりくみ

- ・2015年→「ユニバーサルデザイン」の提案。賛同得られず、一定の時間を必要と痛感。
- ・同年8月→校内研修にて発達課題に対応を基にしたクラスづくりに一定の理解を得る。
- ・2016年→HRづくりと授業でのユニバーサルデザインのとりくみの一例などを提案。その資料（否定的な言葉を好意的な言葉がけに換える（事例）

【否定的な言葉】	【好意的な言葉がけ】
① 最後まで早くやれ	→ここまでよくがんばった
② 上級生なのに情けない	→お手本としての自覚を持とう
③ 何回言ったら分かるの	→どうやったら出来るか一緒に考えよう
④授業を受ける姿勢が悪い	→姿勢の良い人はノートが上手
⑤こんなことも分からないのか	→どこから分からなくなっているのか一緒に確認しよう

### 4 今後の課題と次年度以降のとりくみ

いろいろ検討しながら提案してきたが、なかなかうまくいかない。困難を解決しようとする「主体」が不在の事例がままある。ここでも「伝承」も失敗のツケ、もしくは職場内の同僚性の未熟さという高い壁が立ちはだかっている。次年度からは各分掌・各学年に役割分担を振り分け、そこから発信してもらい、学校全体のとりくみに広げようと考えている。例えば、①学習環境づくりとHRづくりは各学年、②委員会、クラス役員、係決めは生徒会指導部、③授業のルールや注意点は教務、④清掃や教室環境の整備については保健相談部、・・・というように。『ユニバーサルデザイン』で克服しようとする学校という認識を、次々と変わる管理職も含めて学校全体、ある

いは校外に広めていけるかがカギである。と大澤さんは例年通り、努力の積み重ねを報告された。

## 【報告4】 「“私”がこの社会で生きていくということ」

札幌学院大学 人間科学科 二本松一将さん

### 1 はじめに

自身は“愛着障害性”があることを公言しながら生活を送っている。大学生である一方で、江別市にある子ども食堂“ここなつ”を立ち上げ代表を務めている。実母から虐待的な行為をされ、実父からはネグレクトのような行為をされながらも、家族ではなく、地域や学校の大人や同級生に救われ、ここまで生きている。“学力や評価”といったものに捕らわれない等身大の“私”を見守り、応援してくれている私はいきている。私を見守ってくれている、支えてくれている方々へ感謝の気持ちを忘れず、これからも生きていく。

### 2 自身の愛着障害“性”からくる生きづらさ

「愛着障害」という用語が用いられるようになったのは、虐待やネグレクトの急増により愛着の問題がクローズアップされた。その主たる兆候としては①愛着の形成には臨界期と呼ばれる敏感な時期があり、その時期に母親を奪われる体験をすると、深刻な障害が残りやすい。②2, 3歳の時期は、母子分離不安が高まる時期であり、この時期に無理やり母親から離されるという体験をすると、愛着に傷が残り、分離不安が強く尾を引きやすい。③愛着は、その人のベースになるものであり、愛着における重要な特性は、半永久的な持続性である。すなわち、ベースが安定していれば、愛着障害になる可能性は低い。④近年、この症状に当てはまるような子どもが顕在化してきている。自身は高校1年生の16歳の誕生日に離婚することを母親から告げられた。「離婚する。貴方ができちゃったから結婚したの。貴方が生まれなかったら誰も傷つかなかったのよ」という言葉がきっかけである。以降、母親に捨てられた感覚を持ち、父親が信用できなくなる。よって、家庭の中に居場所がなくなる。

### 3 生育史

・1994年 東京都江戸川区生まれ、現在22歳

【生後～16歳まで】（4人家族）

・実父（運送業 39歳） 真面目で、朝5時に出勤し夕方帰宅。母親の面倒を見

ながら掃除・洗濯・炊事をしていた。そのため、洗濯を干したりするのは男性の仕事と思っていた。

- ・実母（専業主婦 37歳） 脅迫神経症状、鬱のある母親。髪の毛一本でも落ちていると掃除を始めていた。しかし、こだわりがあるようで、自分の気になった所のみを掃除していた。身体は健康なはずだったが、外出するときはずも車いすだった。また、リストカットをする癖があり多重人格をもっていた。パニック障害があり、しばしば病院に行っていた。
  - ・長男（私 16歳） 正直、弟が生まれるまでの記憶はない。弟が生まれ、よく抱っこしていました。母親が気に入らないことがあると、私に怒り、玄関の外に数時間立たされていることもよくあった。常に母親の顔色を伺いながら生活していた。
  - ・次男（小学5年生 11歳） 同級生と比べ、身体が一回り小さい子ども。私の後ろに着いてきていた。友達を作ることが苦手だった。おもちゃで遊ぶことが好きだったが、片づける位置を間違えると母親が、私に怒るので自由に遊べなかった。
- 自身の16歳の誕生日に両親が離婚する。半年後には実母、実父ともに違う家庭をもつ人と再婚することになる。私と弟は実父についていくも養育費はもらえず。食事をどうしようと困る。

#### 【再婚17歳～現段階】（6人家族）

- ・実父（運送業 46歳）、継母（看護婦 42歳）、長男（私 22歳）、次男（高校中退 17歳）、三男（小学4年 11歳）、長女（小学2年 9歳）
- ◎高校の先生・・・「飯食ったか？」の電話を欠席するたびに連絡くれた。
- ◎中学、高校の仲間・・・いつでも味方でいてくれた。無理に触れないで、楽しいことを企画してくれた。
- ◎アルバイト先のおばさん・・・手作り弁当やおにぎりを持たせてくれた。

#### 4 大学生に進学して

- ◎子ども虐待・家族とは何か・特別支援教育・地域支援・・・すべてゼミで学ぶこと触れることができた。学びを生かして地域貢献やアルバイト、ボランティアへ。
- ◎長期的なカウンセリングを通して、自己開示、記憶の旅、物語の再構築へ。
- ◎読書を通じて、理論化と言語化をすることで、理解をし、感情コントロールへ。

#### 5 子ども食堂“ここなつ”

- ・発達障害性を持つ子どもを受けれる場としての機能を持つ。若者の自己肯定感や有用感「自分にはこれができるのか、できなくても否定されない」
- ・大学生が親世代と関わることで「仕事」に対するイメージの変化、就活不安の緩和。
- ・独居老人「久々の大人数の食事でも元気がもらえる」
- ・「いただきます」は30人一斉に、食事中には自己紹介を必ず行う。

- ・遊びながら学び、宿題もこなす。
- ・“指導”ではなく“受容”の時間に。
- ・役割や肩書き、所属を越えた“一人の人間”として、その場に“いる”意味。

## 6 おわりに

北海道には子ども食堂が30か所を越えた。子ども食堂を一つ一つインタビューをとったものを卒業論文にまとめる。学校や地域がつながる窓口の一つに“子ども食堂”があれば嬉しい。また、子ども食堂をやりたいと言ってくれる方が、私と出会ってくれれば嬉しい。

若い時期に家庭訪問などのさまざまな問題を抱えてしまうと、社会に参加することは難しくなる。等身大の私を受け入れてくれる他者の存在と、ありのままの姿でいられる場を持つことで一步一步、生きる力に代わっていく。自身のつらかった体験を生かして活躍している若者はいる。仁藤夢乃氏、奥田愛基氏、今井紀明氏などの姿に憧れながら、いま困っている若者に会いともに歩いていけるような人でありたい。自身の辛かった体験を他者に語ることで、いつかその人を動かす“力”に代わっていく。・・・と二本松さんは報告されましたが、【人間にとって成長とは。学ぶとは。という問い】を深く、しみじみ考えさせられました。

昨年度の分科会のまつめを執筆された、共同研究者の内島貞雄先生が、『まとめにかえて』の中で「保護者の生活が困難な場合に学校で（特に小学校で）朝食の対応をすることの是非も問題となった。最近ある新聞の投書欄で論争のような形があったが、多忙な教師にその役割を求めるのではなく、必要な人材を整備して簡単なものでよいので提供することを願いたい。下手な「学力対策」より余程効果があると私は考える指摘されています。

## 【報告5】 「校内外の組織と連携した児童支援のあり方についての事例報告」

全教いぶり 中里明雄さん

※何故レポートを作成したか

- ・「学校が、子ども達にとっての居場所と成り得るように」

### 1 校内組織に関して・・・具体的なエピソードから

◎「公園の落書きを入学式前日に職員全員で消しに行く職場」

- ・「〇小は管理が強くて有名。〇小は荒れていて有名。」生徒指導に奔走する。
- ・その状況から、「学級づくりの安定」→「授業実践の充実」→改善されながら今に至る。
- ・職場有志学習会「ハバシユンの会」をつくってはみたものの→あまりにも多忙。

多忙感の極みの職場。最近は更に「不夜城」化（若者多し）なので、校内・校外研修の中での学びと「炉辺談話」強化にシフト。

- ・子どもに貧困と「生活リズムチェックシート」を行うが、「本当は子どもにもっと目や手をかけたい思いがあるけれど、日々の暮らし・日々の稼ぎで精一杯。」
- ・「言いたいことを言いたいように言えない。」若手教師の支援が必須の職場。
- ・とレポートに書けないエピソードも・・・「病める初任」

## 2 本校区内研修のあゆみからみえるもの

- ・2012年～2014年（算数科）、2015年、16年（国語科）

◎反復練習や模試では「学力向上」はしない。あくまで実態に応じた教育内容・

方法の研究が必要。※これらの積み重ね・ノウハウを道徳教育研究に生かした。

◎いわゆる「炉辺談話」の復権が、「指定校」の呪縛を解いていく。（先輩に指導法を教わる／互いの授業を見せ合う／研究会に学びに行く／放課後レク／飲みに行く／時にはバカなことや無駄なことも一緒にやる／など、職場づくり・雰囲気づくり＝「同僚性」を意識して取り組み、児童の実態把握と学級づくりと生活指導・学習指導は不可分！＝子どもの姿や教育実践が語られる職員室・職場になっているここ数年。

## 3 現場に希望はあるのか？

- ・ある児童虐待のケース《平成26年11月から三度ほど万引き、家庭内放火があったと平成27年4月の家庭訪問で保護者より担任に相談があった。その後、5回にわたり家出。10数キロを徒歩で家出し、小学2年生宅に居座る。保護者には理由を偽って帰宅しない。1月末に父（義父）からの暴力があり、約一ヶ月間、児童相談所で保護。原因として考えられることは①父による暴力と威圧と母（実母）によるフォローのなさ ②家事の加重負担 ③行動の交友の制限（外出禁止・ゲーム禁止・間食禁止など）が考えられる。又は、これらからの逃避行動として。学校では、家庭環境が落ち着かないときに感情的になり、友達とトラブルを起こすことはあったが、実際に暴力をふるうことはまずなかった。3月から自宅に戻るが、平成28年7月末、父が他の家族に暴力を振るい、三人姉弟それぞれ道内各地の「施設」へ。

※私（担任）としての悔恨も含めて・・・①父が「ヤキ入れるわ」と言った11月に、できることはなかったか。②11月から1月までの担任・学校の支援は適切であったか。③児童相談所に送致された時点で、担任・学校の保護者への支援が途絶えた件。④3月から7月までの支援。⑤小学校担任制の利点と弊害。（情報が旧担任には全く降りて来ない）

#### 4 それでも、希望は現場にある

中里さんは、公教育の困難な現状でも、子どもたちと真摯に向き合い対峙して粘り強く実践されています。自分自身での希望の見出しと共に、4つの資料を提示してくれました。そのうち2つ紹介します。

① 雑誌「生活教育」10月号 山本由美（和光大学）「学力体制のもとスタンダード化にどう対抗していくか」

② 札幌教育大学準教授 前田賢次氏「全国学テ」へのコメント

「教員は主体的で深い学びを実現できていると思っけていても、子供たちはそう思っけていないということもあり得るのです。行政や学校は読み書きや計算の強化に偏らず、子供たちが主体的に学ぶための学力の向上に取り組む事が求められます」

#### まとめにかえて

今年度は以上のような報告とともに、非公開として①月形Aさん「放課後学習の取り組み」・檜山のBさん「別の3年間」・奈井江のCさん「教育と福祉をつなぐ～事例報告」の報告が3つありました。

言葉には表現出来ないほど、多忙さが指摘されるなかで、一人ひとりの子どもたちと向き合いながら、問題提起をされる。成長を促す。その成長と一緒に喜びとして分かち合う。そのためには、教師ひとり一人の努力とともに、「どう学級をつくり高めていくか、更に、学年づくり・学校づくり・地域とともに」という視点での報告がにじみ出ていたと考えます。本分科会の特徴とも言える、幼児期から青年期までの最も成長・発達 of 困難さを抱えるうえでの報告もしっかり学べたと思います。報告をされた皆様、分科会参加の皆様、本当に有り難うございました。来年もいっそう深い学びにつなげていきましょう。